

* 聖なるものとコミュニティ

—— 日中宗教文化の比較研究(三) —— 内蒙古自治区(呼和浩特)

*** 高山乾忠・渡辺勝義

キーワード…

儒教合理主義・原儒・道教・鳥居龍藏・シャーマン・シャーマン教・喇嘛教・M・エリアーデ・シャーマニズム・オアシス・聖なる民・脱魂^{エクスタシー}・憑依^{ポセシヨン}・ニューアカデミズム・『搜神記』・行・遊離魂・個人実体論・オポ

一、はじめに

すでに日中宗教文化の比較研究(一) 福建省―でも述べてきたことであるが、本研究は日中の文化、それも宗教の分野に視点を向けた宗教文化の比較研究である。宗教は本来、実在の神との邂逅を根幹とし、またそれをめざすものであった。古代に遡るほど、神意を請い(託宣)、神教を第一として政治(まつりごと)に誤りなきを期したのである。この宗教の尤も根幹部分である聖なるものとの接触・交流を果すためにはE・デュルケムが『宗教生活の原初形態』(注1)で述べているように一定の作法(儀礼)が必要なのであり、でなければ非常に危険を伴うものであることが知られている。聖なるものと如何にして関わるか…といった、宗教のエッセンスとも言うべき「行法」・「行」形態などを中心に、現存するシャーマン(行者)と直に接触し、日本と中国双方の、特に神道と道教などの宗教が有する行法についての調査・研究を実施する。調査・研究の初回は上記に関する日中それぞれの文献研究(古典)を主に行い、二回目以降はまず中国での現地調査・研究を四〇五回実施した上で、日本国内における研究を続けて行っていく予定である。

勿論、この行法の分野の研究はこれまで全くなされてこなかった研究である。日本では明治政府が採った儒教主義政策の故に、それまでの神道か

らその中核となる鎮魂法や帰神術といった「神意を伺う」ための「行」を抜き取ってしまう、形骸化した神社神道になっってしまった。つまり地域(土地)の神など、いわゆる「聖なるもの」との繋がりを自ら断つたのであり、これは儒教合理主義の持っている根本的な欠陥である。このことは中国についても言える。中国においても道教を知ると言う事は即ち破壊のすさまじさを知ることと同義と言ってもよい。儒教は神主義ではなく人主義であり、従って土地の神など聖なるものはまったく省みない。ところが中国であれだけ儒教主義が席卷したのに道教が何故残ったのかは一つの大きな問題であるが、これが庶民のものであったという事は言えるであろう。しかし、道教の存続には科挙試験の存在がからんでいる。道教最大の顧客は科挙試験志願者たち及びそれを支援する有力親族たちであり、親族の浮沈は身内に科挙試験合格者が出せるかどうかにかかっていた。この一族の命運をかけた現世利益的願望の受け皿は決して儒教ではなく、他ならぬ道教乃至仏教であった。しかし彼らはこの道教に呪文以外の何者も期待してはおらず、その呪文の意味を解こうとするあらゆる情念を持つてはいなかった。彼らは道教・仏教系の呪術師たちを全く馬鹿にしながらも、しかし最も強欲にこの現世利益的な効果だけは期待している。このような状況がどれほど大きな禍根を道教や仏教に与えたかは想像するに難くない。

本研究によって、日本と中国の文化の根底に流れている宗教的思想惟あるいは精神構造について、その相違があらたに見えてくると思っている。

* Received February 2, 2008

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 地域づくり学科、国際交流学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

二、内蒙古自治区の政治・経済と宗教

(イ) フフホトの政治・経済と宗教

フフホト市は内モンゴル自治区の自治区都所在地で（人口二〇七万、うち市部一〇五万）、他の市の人口として包頭（二三六万）、烏海（四〇万）、赤峰（一一一万）、シリント（二四万）、ハイラル（二三万）である。少数民族としてはモンゴル族、満族、ダフル族、エウエンキ族などがある。本自治区は中国の北疆に位置し、モンゴル、ロシアと国境を接する新疆、チベットに次ぐ中国で三番目に面積が大きい行政区である。市名はモンゴル語の「青い街」の意。一五八七年にアルタン・ハーンが街を囲む城壁を築いた際に、青色のレンガを使ったことに由来するとされる。北京から約六七〇キロメートル、航空機で四五分、列車で約一二時間と、内モンゴル自治区の中では首都圏へのアクセスが大変便利になっている。旧市街地の玉泉区は面積二一三平方キロメートル、人口一九万人と小さいが、一九八〇年代からは市東部の開発が盛ん。石炭資源が豊富なことから、電力不足は深刻ではない。全国的に有名な企業としては内蒙古蒙牛乳業（集団）股份有限公司、内蒙古伊利実業集団股份有限公司など、乳業メーカーが多く集中している。一五七二年にダヤン・ハーンによって創設された。ダヤン・ハーンは一三六八年の明朝成立に伴い北方に退き、長い間分裂状態にあったモンゴル諸部を統一し、モンゴル民族中興の祖とされる。ちなみに、ダヤンは「大元」の意である。後に、明朝はフフホトに「帰化城」という名を送った。清朝は「帰化城」の北東約二・五キロメートルの位置に新しい街を作り、「綏遠城」と名づけた。清代のフフホトは、南方からの漢族と北方のモンゴル族の交易の街として機能した。また、ロシア商人も訪れるようになった。ただし、都市として本格的に発展しはじめたのは中華人民共和国成立以降になってからである。一九五三年、それまで張家口にあった内モンゴル自治区人民政府が、フフホトに移転し、自治区の政治文化の中心となっている。

内モンゴルはモンゴル高原の南部を占め、全体的には地勢は平坦であり、海拔一、〇〇〇m以上である。東部には大興安嶺山脈が中国東北地方を遮るように縦断し、中央に陰山山脈、西部に賀蘭山脈、西南部域外には祁連

山脈が外界と隔てるように走っている。高原東部はホロンバイル、シリントールなどの広大な草原が広がり、気候は温帯草原区に属し、乾燥地域の中では比較的雨量の多い方である。呼倫湖、貝爾湖など塩湖が多く点在する。中部から西部にかけて百靈廟高原、河套平取オルドス高原が広がる。

オルドス高原は東・北・西三面を黄河に囲まれ、南は長城によって区切られている。陰山山脈は中国の内流河と外流河の分水嶺をなし、その南麓の河套平原とその東のフフホト平原は黄河並びにその支流の流域にあたり、古くから灌漑農業が行われている。一方、西北部にはゴビ砂漠が広がる。

気候は温帯の大陸性気候で、東北から西南にかけて湿潤、乾燥の四つの気候帯に分かれるが、大部分の地域では四季がはっきりしている。夏は短く、昼夜の温度差が大きい。冬はきびしく長い寒さが続くのである。年間平均降雨量は五〇〜四五〇mmの間である。

モンゴル族が歴史の舞台に現れたのは一二世紀末から一三世紀はじめにかけて、チンギス・ハーンが高原の諸部族を統一し、更に大西征してモンゴルの大帝国を築き上げてからである。孫のフビライは中国を統一し、一二七一年に国号を大元と称した。

一四世紀、元帝国が崩壊すると、明代には中原から万里の長城の北側に駆逐され、モンゴル族は大きく三つの勢力に分かれた。東部はチチハル平原一帯のウリヤンハイ、中部は漢族から義範と呼ばれたタタール、西部はオイラートである。

清朝はモンゴル勢力の再生を警戒し、盟旗の制度を確立して移動を許さず、定居牧畜あるいは農業を強いた。一方、漢族が内モンゴルに入植・開墾をはじめると、牛や羊などの放牧地はますます失われていき、モンゴル族は次第に北方に追いやられていった。

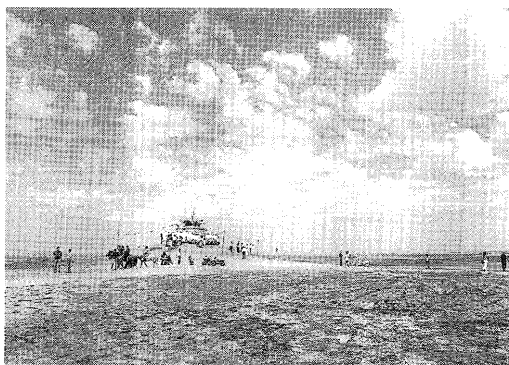
辛亥革命が起こると、モンゴルも独立を宣言し、外モンゴルは次第に中



車中から見たゲル群

国から離脱し、一九二一年モンゴル人民共和国を成立する。一方、内モンゴルは軍閥による支配が続ぎ、内戦の最中、四七年五月一日に内モンゴル自治区が成立し、区都はウランホトに置かれ、二〇年代から共産黨員として活躍したモンゴル族のウランフが初代自治区主席に就いた。区都がフホトに変わったのは五四年。時期的に自治区の編成に変更が為されたが、七九年隣接省の一部が編入され現在に至る。二〇年代以降多くの漢族が入植し、現在、自治区総人口に対するモンゴル族の占める割合はわずかに一割強にすぎなかったのである。

自治区は八〇年代に入って、交通や通信ならびに電力供給施設などのインフラストラクチャーが徐々に整備され、また少数民族の自治区域であるため、経済の発展と対外開放ではさらなる優遇政策がとられてきた。積極的に外国資本を誘致するために自治区独自の税収面での優遇措置もとってきた。その結果、郷鎮企業も急速に発展し、近年その総生産額は一、〇〇〇億元の大きさに乗り、一方、牧畜業や農業などもかなりの生産力をつけてきている。対外開放の面では、現在、一〇〇近くの国・



オボ（宗教施設）の遠景

地域と貿易を行い、経済協力関係を結んでおり、六八〇品目以上の生産品が国際市場に出ている。自治区全体には、一八の国境貿易通関地があり、内陸での貿易窓口が全国で最も多い区（省）となっている。

自治区の宗教はチベット仏教（ラマ教）を受け入れたが、古層の習俗としては、シャーマニズムに根ざした「オボ（郡博）」と呼ばれ、特別な石塚でカミを祭るものがある。その他に毎年、オボの祭りが各地で開かれ、競馬・騎射・相撲などの競技の後、皆でオボに供えた肉や酒を飲食する。このような祭りに部族が集まる最大の娯楽集会在「ナダム（那達幕）」である。現在は宗教的色彩は薄れ、競技会と物資交流会・演芸会が主となっているが、同行事は現在もなおモンゴル族の最も楽しみとする祭りである。

民族と生活文化について、かつて遊牧生活を行っていたモンゴル族は、漢語で蒙古包と呼ばれる組んだ木枠にフェルトを張った幕舎（エスゲイ・ゲル）を住居とした。本来、包（パオ）とは満州語で家を意味する「ボ」の音訳とされている。主に草原で生活していた彼らの間では、数々の英雄伝が伝えられ、なかでもチベット地方から流伝した胡弓「ゲセル伝」を四弦胡弓を弾きながら語るモンゴル特有の語り物は有名である。また、馬頭琴と呼ばれる胡弓はモンゴル特有の楽器である。

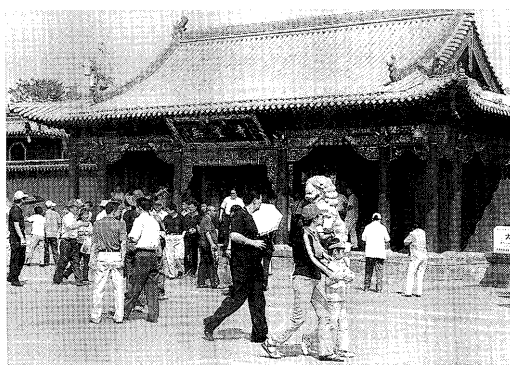
改革・開放政策によって、経済的発展は著しく、近年の自治区全体の国内総生産（GDP）は自治区成立（四七年）当初に比べてもおよそ五〇倍となっている。食糧総生産額や家畜飼育総数なども確実に増加、発展を遂げており、なかでも毛皮類などを含めた畜産製品は全国でも重要な位置を占め、国内でも重要な食糧と畜産の生産拠点の一つとなっている。

さらに、工業分野の発展に伴い、郷鎮企業も急速に伸び、交通や通信、対外開放なども徐々に整備され始めている。自治区内の満洲里、エレンホトなどの国境貿易通関地はモンゴル、ロシアそしてヨーロッパの市場に通じる最短コースの窓口として重要であり、自治区自体も中国国内では環渤海、東北、西北の経済圏の中に位置するため、今後ますます経済的發展を遂げる可能性が高くなるであろう。

（ロ）聖なるコミュニティの変遷

本来、移動民族であるモンゴル族の民は強い血縁関係を持ち、信じられるのは血の繋がりであり、通婚の範囲も同じ血族の中だけに限られていた。他の移動民族と出会うと争いが起こるため、ここで強い意味を持つてくるのは争いを調停する者である。その多くの役割を担う者たちがオアシスを支配していた。冬になるとオアシスだけが寒さから逃れ、水を確保できる場所であり、彼等移動民族にとってオアシスは「聖なる地」なのである。このオアシスにはこれを守る「聖なる民」たちが居たと考えられ、この構造は今でも基本的には変わらない。聖なるオアシスを持つ血族は「公正さ」を保つために他の民族とは一切婚姻関係を持たない。シャーマニズムも、基本的には争いごとの調停のためにあったとも言える。争いごとが起こった場合、その裁定は神からの神託でないと信頼できないからであり、これをカーディ型社会ともいう。

これと逆の構造であるのがシルクロード仏教であり、これはインド仏教とも異なる。モンゴルにおける大乘仏教時代のあり方は、オアシスの聖なる血族の中から王を選び出して、その王を輔佐する霊的能力者としてボーディサツトバ（菩薩）が王国を支える……という制度であり、王は法の番人であった。その王は他の血族との間には公平性を保つために、すべての血族と婚姻関係を持つ。嫁取りをすることで信頼関係を獲得するのである。そして生まれた子供達は、王になる者以外は里に引き取られてその里の貴族（リーダー）になっていく。イスラム教の受容はこの関係を完全に逆転させたと考えられる。イスラム教の後にラマ教（チベット仏教）が入って来るが、但し、ラマ教は王国を形成するまでの力はなく、むしろ密教的な信仰をもたらしした。



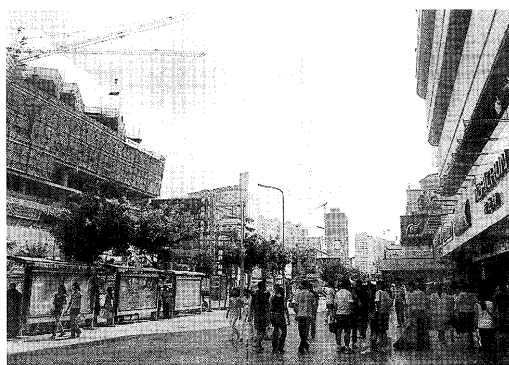
無量寺

三、大草原を吹き抜ける青い風

今回の研究調査地は内蒙古自治区の呼和浩特（フフフフ）である。ナードムの祭り月である八月一〇日、福岡国際空港から大連経由北京行き（一三時一〇分発）の便を予約していたが、例によって三時間以上も遅れて一六時半に福岡を出発した。大連の空港からはタクシーで大連駅（鉄道）の近くのホテルに向い、夜は大連市中山区の商場新生活食品超市をブラブラ歩き回った。久し振りに、といっても一年振りののだがあの独特の……といったらしいのだろうか、すれ違う人々や街の雰囲気に触れて、言葉にならないが何かしら懐かしく温かいぬくもりを感じた。活気溢れるエネルギーに中国に直に触れることが出来、活力が蘇った感じがした。やはり人は浸り切っている現在の生活環境を思い切って出てみないと分らないこと、見えて来ないこともあるのだナ……ということを知った。職

務柄であろうか、置かれた環境にいつの間にかドップリと浸り切り、本来の自分というものを忘れてあまりにも内に閉じこもり過ぎていたことに気付かされる。こうして中国を旅行する度毎に、忘れかけていた生命の躍動や生き生きとした瑞々しい感覚が甦ってくるのを感じるのは私たちだけであらうか。

翌朝五時に起床し、大連周水子国際機場から北京に向けて出発。一〇時半には北京空港に到着した。北京から一四時発の飛行機でフフフフに向い、一四時四七分には一週間前にオープンしたばかりというフフフフ新空港に到着した。フフフフ新空港に降り立つてまず目に入ったのは「内蒙古自治区成立六〇周年記念」と大きな文字で書かれた横断幕であった。また、市内には「熱烈祝賀内蒙古自治区成立六〇周年（一九四七年〜二〇〇七年）」とか、「熱烈慶祝内蒙古自治区成立六〇周年」といった大きな垂れ幕や看板などがしきりに目に飛び込んでくる。「大草原と羊ばかり」と勝手に思い込んでいた内蒙古はすでに立派な都会であった。建ち並ぶ近代ビル群を見て私たちは驚いてしまった。車中から見た光景は都会そのものであり、ビルの屋上にはイスラムのモスクにも似た建物があちこちに散見する。中心部にある維多利亞パート一階の洋服売り場を覗いて見ると多くの買い物客が大変な活況を呈しており、また他の階には今流行のデジタルカメラや携帯電話等の電子機器はもとより、日本にあるものはすべて何でも……といった状況であった。「此処が本当に内蒙古なのか？これまでとんでもない思い違いをしていた！」と正直思ったものである。ここは一体どこの都会か？と見まごうばかりであり、無いのはただ地下鉄だけだった。また、二回とも市内で乗ったタクシーの運転手は女性であった。聞いて見ると、内蒙古では今や自家用乗用車の購入が大ブームであるとのこと、この二〜三年、車が急増しているという。また、去



ビル建設ラッシュで賑わうフフフフ市内

年、業務用タクシーを七百台ほど増やしたが、それでも全く不足しているといった現状であるとのこと。斯様に中国は何処も激しい変化の波にさらされていると言えよう。

その夜は内蒙古民族計算機学校の包明校長他と草原宮で待ち合わせ、私たちは歓待を受けた。初めに出了れた（女乃）茶は丁度砂糖が入っていないミルクティーといった味がした。私がそれを喜んで続けざまにガブガブ飲んだら、校長さんたちは珍しそうにしげしげと私たちを見ていた。普通日本人はあまり好んで飲まないそうである。砂糖があつたら、本当はもっともつと飲めたのだが……。さて、このゲルでは、モンゴルに初めて訪れた客に対する歓迎の儀式があるということで、若いイケメンのモリンホール（馬頭琴）奏者と女性歌手（二名）とが祝いの酒を持って歌舞の儀式があつた。また、最初に気がついたことだが、あちこち覗いて見ると、どこのゲルにも入り口からみて正面奥にはチンギス・ハーンの写真が掲げられていたのは印象的であつた。彼等は自分たちの共通の祖先としてチンギス・ハーンを崇拝しているのである。また、ハダ（*hada*）という白絹のマフラーを戴くため？には蒙古王などといった銘柄の三八度以上の強い酒を飲まなければならなかつた。ハダには草原の色である青色の絹もあるのだ……とか（他に赤・黄色も）。包明校長の相貌がゲルの奥に掲げられているチンギス・ハーンの写真によく似ており、また校長は大らかな人で非常に酒も強く、草原民族のいわゆる「勇于创新、襟胸博大、聡明智慧の民族性格」を思わせるに十分な御仁であつた（ハーンとは「心が広い」という意味だとか）。

内蒙古での滞在は三日間であつたので、初日には蒙古相撲をはじめ、フフホト初の寺院である大召（銀仏寺）や無量寺その他の寺院を訪ねてみた。また翌日には哲里木路を一路北を目指して岩肌がむき出しの殺伐とした山々の間に通る道路をひたすら車を走らせて



モンゴル相撲（ナードム祭）

水泉村を通り抜け、モンゴル草原（武川県）にも行つて見た。だが、何処に行つてもスッカリ観光地化して観光客が大勢で押し掛けて来ており、私たちが捜し求める真正の行法修行者などは見当たらなかつた。大草原のあちこちには幾つかゲルが点在していたが、そこで暮らす住民たちの生活スタイルはスッカリ変わっており、そこでは観光客相手の客引きが盛んに行われていた。観光バスが何台も停留しており、また、観光客相手の乗馬（二時間で六〇元）も盛んであつた。

初めてみた大草原、都会の喧騒から逃れて見渡すばかりの大平原は一大パノラマをなしている。どこまでも広く青い空、沸き立つ白い雲、何処までも続く緑の草原、吹き渡る風、雄大な自然の中であつて、如何に己がちっぽけな存在であるか、そして命あることの如何に大切であるかを考えさせられる。行き止まり地点（召河）の直ぐ近くに新しい建物が建っており、は何だろうと思つてよく見ると、それは何と税務署であつた。「こんなところになあ……」と何かしら考えさせられるものがあつた。

また、大草原の小高い丘の上にボツンと建っている天の神を祀る宗教施設「オボ」（オボ）があつたが、近付いてこれを見るのにさえ、一人五元の入場料が必要であつた。ここでは雨乞いの儀式などをするのだという。私たちが見たこの宗教施設「オボ」は約五百年ほど前からあつたのだという。ここでは観光客の善男善女が線香を焚き、白絹にマジックで何事か真剣に願い事を書き、これをオボのあちこちに括り付けていた。斯様に、ここまでスッカリ観光化されてしまうと、古い宗教形態はかなり変容してしまつており、調査も困難を極めることは当初から覚悟の上ではあつたが……。



オボ（宗教施設）近景

四、中国に於ける宗教復興の背景

中国の宗教とはいえば、道教、仏教、儒教、景教（ネストリウス派キリスト教）、マニ教、天主教、イスラーム、ゾロアスター教など実にさまざまな宗教が生息している。そして今日、文化大革命によって破壊された諸寺院の復興が各地で盛んに行われているのであるが、その背景についてここで一考しておく必要があるであろう。

一九六〇年代前半といえは左翼思想が世界を席卷し、無神論的実存主義者のサルトルを持ち上げたりした時代であり、「宗教は世界を撲滅する」という考え方は共産主義の基本テーゼであつただけでなく、アメリカでもそうした考え方があつた。しかるにこのような状況を批判してヨーロッパでは構造主義が登場し、近代を積極的に告発する動きが強まってくる。それに対応するように一九六〇年後半から一九七〇年代にかけてアジアの中に真実があるとし、その中でもインドやチベットに聖なるものがあるとして関心が高まり、ヨーロッパやアメリカの白人達が大量に参入してガンジス川に参入するなどインドブームが起きた。一九七〇年代後半になってベトナム戦争が終わる頃、ニュー・アカデミズムが中国にも持ち込まれて、特に紅衛兵運動が徹底的に糾弾されて、共産主義体制を保ちながらも社会操作の方向をニューアカデミズムに変換することになる（六〇年代には神を信ずるとしたアメリカ学生が一割未満だったのに、この七〇年代後半には同国の学生の約九割が神の存在を信じると答えている）。この思想状況が中国にも一気に流入したのであつた。つまり、中国において今日、古い宗教が復興しつつある：と安易に見るべきではないということである。ニューアカデミズムによるトレンドとして捉えていく方がより正しいであろうということである。



大召寺

中国は文明化されて以来、長い歴史を持ち、その間に幾多の変革を受けてきた。特に明・清時代に儒教化が徹底し、それに輪をかけて事態を非常に複雑にしたのは社会主義革命であり、その上、更に文化大革命という傷が入っている。例えば宗教を考えた時に、粉々に割れた小片を張り合わせでまるで鏡を復元するような作業があつて、しかもその復元した鏡には何も映らない——という危険性がある。本研究はそれを覚悟した上での研究であることをまず自戒しておく必要がある。

一つ例を挙げれば、一九八〇年代以降、仏教寺院や道観、儒教廟など色々な宗教施設が復元されている。それは宗教の復興であると書かれるけれども、実はこの時期に地球規模で構造主義ブームが起きて、猫も杓子も伝統復興・宗教の回帰と吹聴するようになる始末になっている。従つて、それは新たに流行として作られたものと見ないと非常に危険であつて、このことは旧ソ連などについても言える事である。社会主義革命以前のものが、果してどこまで現在に連続性を持つているかというのは非常に疑わしい。

道教を例に挙げれば、多分にこれは中国に於ける現世利益的な願望を引き受けてきた根幹的な技術であり、その淵源はとても古いものである。そこで作られた聖典類も意味のある思想的語彙から成り立っていたものであり、詠めば分かるというものであつた。だがしかし、現在の道教聖典は全体が意味不明の文章から成り立っている。つまり、分らないから有り難いという意味づけがなされている。しかしこれは、明・清時代にそうなってしまったのであり、明・清時代の道教の原本は宋代末期に宋の滅亡と共に失われてしまった。明・清時代に見つかったさまざまな断片から現在の道教の原典が復元された。これは縦横メチャメチャな配列で復元されてしまったものであり、意味不明なのは当たり前である。ところが非常に幸いな事に、その原本は宋代に日本に輸入されており、完全版が存在している。従つて、中国道教の意味不明な聖典の中味はほぼ解明されている。このような状況がどうして起きたかという点、極端な儒教主義が仏教や道教の排撃を生み出して、徹底的な破壊が行われたからである。知性のある人材が仏教や道教に投入されなくなってしまったので、メチャメチャな聖典でも呪文として何の疑問も持たずに継承されてしまった。このような状況の元で道教をどう捉えるかということは極めて慎重な配慮が必要である。彼らは体

感的には人類普遍の原理として聖なるものが何かを感じる事が出来るけれども、ロゴスの回路を塞がれているので、その説明のしかたは当然、体系的が無く、聞き返す度に同じ人でも違った答えが返ってしまし、時間を置いて同じ質問をしたとしても、全く違った文脈で、全く違った説明をしてしまうという状況を免れない。また、人が違えば同じ組織の中に居ても平気で相矛盾する説明をしてしまう。従って、我々がもしこの道教問題に本気で取り組もうとすれば極めて困難なことであるけれども、体験的な直感として聖なるものをどう受け止めているかということを経験的に説明するしかないだろう。彼らがロゴスで意識化出来ておらず、無意識で行っている「行」形態の根源的な行動解明しか、聖なるもののあり方を捉える事は出来ないだろう。道教は更に文化大革命でその存在基盤すら破壊されてしまった。社会主義革命から数えて五〇年、文化大革命は約二〇年もの長きにわたってその「行」形態すら破壊してしまった。これは極めて重い。そのことを踏まえた上でなければ、現在の鄧小平路線での中国における宗教事情（状況）というものを捉える事は極めて危険であると思われるのである。

五、鳥居龍蔵が見たシャーマン教（注2）

この項では浅薄な現代のシャーマニズム論に汚染される以前の神と人の関係について鳥居龍蔵氏の調査研究をもとに見て行きたいと思う。日本では明治以降、欧米列強に習って近代化を推し進めるのに性急であったし、また先の大戦後はより一層、旧来の地縁・血縁共同体を潰して個人化を図ってきたことは周知の如くである。ところが東北アジアではまたもや共同体の再評価がおきて、今、儒教が再び脚光を浴び始めている。だが、儒教というと大半の人は倫理道德や礼教性としての儒教という理解であり、その宗教性についてはあまり普及していない状況である……と主張するのは加地伸行氏である。儒教は孔子に始まるが、その思想的、理論的母体即ち「原儒」というべきものがあつたと加地氏はいう。氏によれば、「儒」はもと「巫祝」（シャーマン）を意味する語であり、儒は古い呪的儀礼や喪葬などのことに従う下層の人たちであつたという。この原儒の本質はシャ-

マンであり、

儒教は原儒のシャーマニズムを基礎にして、孝という独自の概念を生み出し、この孝を基礎にして家族理論を造り、さらにその上に政治理論を造り出し、一つの体系的理論を構成したのである（注3）

と述べている。しかも氏によれば、そのシャーマニズムはかなり限定的であつて、さまざまな神霊を招き降ろすというよりはむしろ、多くは自分の血縁者すなわち自分の祖先の霊を招き降ろすのが主とされ、本質的には子孫一族の行事であり、各家族自身が行う儀式として普遍化したのだというのである。（注4）

ところで、蒙古の宗教はもとシャーマン教であり、それに仏教（密教が主）や道教が入り、また儒教も盛んに行われた。喇嘛教は鳥居龍蔵によれば「元時代にチベットより蒙古に入つて来たもので、固有宗教はシャーマン教であつた」という。（注5）

また景教（ネストリアン教）もあるが、蒙古にこのキリスト教がいつの頃から入つてきたかと言うと、鳥居龍蔵氏の著『満蒙の探查』によれば、

一二五三年（シナの宋の理宗の宝祐元年）にフランスのルイ王九世は、蒙古王朝に基督教の僧侶ルブルッキ（Rubruguis）を派遣した。この時の王都は外蒙古のカラコルムにあり、その時の王はジンギス大汗が亡くなり、その後の拔都汗の時であつた。（注6）

と述べている。また、何のためにこの基督教僧侶が来たかというところ、当時十字軍の盛んに出兵・遠征した時であつて、ルイ王九世はパレスチナに出陣をして居たのである。仏王は殊に基督教僧侶に親しく書面を持たして蒙古王の処に行かため、敵を東方から攻撃して十字軍のために助力せられんことを請うたのである。これに対して蒙古王から、



韓・中・日 国際学術会議にて

仏王に宛てた書面が今もなお残っている。この書翰の文言は、ウイグル文字で書いたものであるが、一六二九年にラテン文に翻訳されて居る。(注7)

とあり、「これが初めて基督教僧侶が公式に蒙古の土地に入った最初である」(注8)と記している。鳥居龍蔵が探検調査した頃はどのような状況にあったかをここで見てみよう。『蒙古旅行』中の「東西札魯特」^{チャロツト}紀行、特に興安嶺の峻坂を越える時の彼の調査日誌には、次のような興味深い記事がある。



基督教堂

道は東に寄りたる南に向ひ、主として河に沿ひて進む。途中一個の村落を見たのみ、他は尽く無人の境なり。左右は山にして道は谷間を通ず。途中随行の若者は牛車の牛を代へ、即ち之迄能く歩み居れる牛を、悪しきものと代へたれば、牛車の進む事非常に遅くなれり。而も余等は目的地に向ひて進まざるべからずとて、漫々として進み行けり。行けども行けども人家に達せず。出発してより十清里許り進みし頃には全く夕暮となれり。余等と同行せる二人の役人は、余等一行の通過を、前方の村落に報ぜんとて去りたれば、後に残れるは余等と二台の牛車のみ、之には一蒙古人と喇嘛の小坊主との二人御者として随ふのみ。

日没頃より、彼等二人は経を読み始め、車の後に随ひ来れるもの前方に出でんとし、其の顔色も少しく変じ来れるが如し。特に道端に一本の楡の大樹あるを見たり。余は此辺に斯かる大木あるを不思議に思ひ、車の上より彼等に、其の枝を折り取れよと命ぜしに、彼は手を打振て之を否み、甚だ好まざるが如かりき。

此の附近は頗る陰氣にして、左右は山峙ち、其の間を河水流れ、河岸に此の大木あり。而して此の木の下は水最も深し。

余等の車は此の楡樹に殆んど摺れ摺れに通過せしが、其の後に余は

戯れに彼等に向ひ、此の附近は妖怪出るに非ずやと問ひたるに、彼等は顔色蒼白となり、実は其の事なり、大人は外国人なれば知らざるも、此処は妖怪の出る場処なれば、蒙古人等は暮近くより一人も此処を通るものなし。即ち今過ぎ来れる楡樹には主棲み、或いは其の樹より鬼火出で、飛び廻る事あり、実に恐ろしき所なり。又彼処にて温かくなく吹く又冷たくもなき一種言ふべからざる不快なる風の吹くを感ぜられしならんが、之斯かる妖怪変化の出る処に非ざれば決して感ずる事無きものなり。又聞かれよ、左右の山には人の唸くが如き声するを、大人は知らずと雖も、此処は斯かる不思議なる事のみ多き恐ろしき処なり。されば余等は車の後より随ふを好まず、前になりて進みたるなり。又此の妖怪の害を避けんが為に数珠つまぐり、経文を誦し、切火をなして通りしなり。斯くすれば妖怪も決して害をなさずと語れり。

(中略) 此の日の行程四五清里、而して無人の境を行く事、実に二五清里程なり。(注9)(傍線、引用者)

これによつても、当時の研究調査というものが決して安易なものではなく、むしろ如何に困難を極めたものであったかが知れよう。調査の一行が途中もしかして妖怪変化と遭遇したらどうしようかと恐れて顔面蒼白となるなど、まるで、仏教の奥義をきわめるために長安の都から西域を経てインドに渡ったかの唐の玄奘(三蔵法師・法相宗の開祖)の西遊記さながらである。

鳥居博士の探査旅行は解題によれば、日清戦争が終わる明治二八年八月一〇月に始まる。東京人類学会の依頼を受けて、遼東半島を踏破・調査したものであり、その後、明治三八年九月〜十一月には東京帝国大学から派遣されて満洲と東蒙古の一部を、また明治四〇〜四一年の調査旅行の出発点は内蒙古の喀喇沁王府であり、もっぱら東蒙古の地で行われた。こうして氏の調査は明治から昭和にかけて日本国内のみならず、東アジアのほとんど全域に及んでいる。(注10)

さて、鳥居龍蔵氏の研究調査によれば、当時蒙古人の間では占易が盛んに行われ、家相などのことも非常に氣にかける風があつたという。また、チベットから入ってきた喇嘛教以前の固有の宗教はシャーマン教であり、曾て遼や金などに行われていたという。

先述した同氏の『蒙古旅行』「四 東烏珠穆沁王」によれば、其の地在住蒙古人の性質について述べたところがあり、その宗教について次のように述べている。

蒙古人は今日一般に喇嘛教を信仰し居れるも、此の宗教は元、チベットより伝はり来れるものにして、蒙古人には別に固有の宗教即ちシャーマン（巫女）ありしなり。此のシャーマンは昔時、シベリア、満州及び蒙古に、盛んに行はれたる宗教なるが、蒙古人は一度喇嘛教を信仰して以来、此の固有のシャーマン教は次第に衰へ、漸次蒙古人等は喇嘛教化せらるゝに至れるなり。而もシベリアに於ては此のシャーマン教今尚ほ盛んにして、又彼のダウール、ソロン等も尚ほ此の宗教の信者なり。余は曾て興安嶺山中及び其の附近には、尚ほ此のシャーマン教信者ある事を、即ち此の東烏珠穆沁地方に於いて、今尚ほ其の宗教の行はれ居るを屢々耳にせるを以て、余は役人を介して、此のシャーマンの巫女を呼ばんとせしに、此の地は喇嘛教の精力盛んなる処なれば、余等に此の事を聞かるゝを厭へるものゝ如く、シャーマン等は其の領地内にあらずとて、如何にしても実を吐かざりき。而も他の蒙古人は、此の地に同教の行はれ居り、殊に王府の儀式等には、シャーマンの遺風を加味すとさへ言へり。されば此の事は疑問として、此処に残し置かん。（注11）

こうした鳥居氏一行が実地に調査した時代のシャーマンたちと較べると、現代のシャーマンと称する者たちは彼ら自身がすでに近代人であり、現代的知識を十分に持つていて見学者にそれを上手に演じて見せるので、今それを見ても何ら学的に裨益するところはないだろう。熟知している人は無意識とされていることを意識的に行い得るので、見たまま聞いたままを研究者が分析しても何の意味も持たないだろう。彼等シャーマンが真に無自覚に行っているのを研究対象としない限り、決して真実は見えてこないと思うからである。

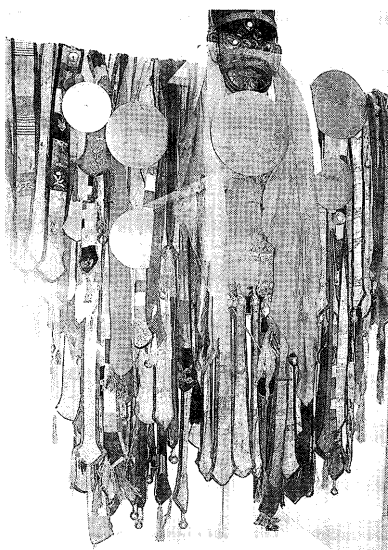
鳥居龍藏氏が当時実見したシャーマンは次のようなものであったと記している。

金の時代には、シャーマン教の巫女が神前で祈祷をする時に、神が巫女に乗り移り、あるいは死霊が乗り移って狂乱のようになる。而して

遂に悪霊・死霊等を退散せしむるのである。これをなす儀式は一人の人が傍らで太鼓を叩き、巫女は手に鈴の如きものを持ち、神前で舞踊をなす。その時腰には五六枚の鏡を革帯に下げる。これを称して腰鏡という。その腰にまた原始的の鈴をも付ける。これらが神がかりになり、巫女が熱して来ると盛んに舞踊し、それがために腰の鈴が光を発し、相触れて一種の音響を出す。これは彼らの最も尊厳なものとして崇ばれて、悪霊・死霊を退散さすのである。この風は、今日の黒龍江方面のツングースからシベリア一帯の民族の内にも行われて居る。（注12）

続いて、氏によるシャーマン研究調査の記述を見てみよう。

西札嚕特にてシャーマン教を信じ、其の巫人として現存し居るは、タモと称する六七歳の老婆と、之に従へる弟子（Shabi）



シャーマンの衣裳

のウルチと称する四三歳の男とたゞ二人のみ。此のタモの夫も亦巫人なりしが数年前死去せりと。彼女の語る処によれば、其の家は代々巫人にして、彼女に至る迄既に十数代を経たりと。之に因て見れば、巫人は代々其の子孫に伝ふるものたるを知るべし。此の附近の蒙古人は、深く巫人を信仰し、若し家に病者あれば、直ちに礼を厚くして彼等を迎へ、以て其の祈祷を乞ふを例とす。（注13）

とあり、またその巫女の服装については、余等の招きに応じて来れる巫人の服装を見るに、タモは頭に、鉄にて造れる宝冠の形、恰も五徳を逆さにしたるものゝ、中央に鳥の形したる金具を付け、前額の所には虎の頭を彫りたる板金を張り付けて装飾したるを戴き、宝冠の後には赤地に縫取りを施したる、三条の細長き布を垂る。衣服は通常の蒙古服と異なる処なしと雖も、腰には五色の絹を以て堅折目の処を縫合せたる長き裳をつけ、又裾の端には波状に

切り目をつけあり。足には靴を穿ち、腹帯の処には横に数枚の鏡を連ね佩べり。弟子の服装亦同じ。二人の腰にせる鏡は何れも古鏡にして、巫女は九枚、弟子は八枚を佩べり。而して此の古鏡は何れも、明代若しくは其の以前のものにして、殊に海獸葡萄鏡最も古し。此の葡萄鏡は二面あり。各々其の一面宛を腰にせり。之等の古鏡は土中より掘り出せるものに非ざれば、彼等の祖先より持ち伝へたるものなるべし。而して彼らの鏡を腰にせるは、一は其の尊嚴を示す為なるべけれど、又一方には其の舞踊する際に、之等の鏡の相触れて、一種の音響を発するが為ならん。要するに之は、彼の満州人のシャーマンの腰鈴、若くは現今シベリアシャーマンの用ふるものと同一なり。彼等は又各々手鼓を持てり。其の形扁平にして一方のみ皮を張り、幅一尺三寸五分、堅一尺一寸、楕円形を呈す。之に鉄の柄を附し、柄の先端は錫杖の如く作り、九個の鉄環を入れあり。之太鼓を撃ち叩く際に動揺せしめて、共に音を発するが為なり。而して巫女の持てる太鼓の表面は、皮の色の白色のものなれども、弟子の持てる方は、特に赤色を以て之に塗れり。其の形状は我が国日蓮宗のものと稍相似たり。(注14)

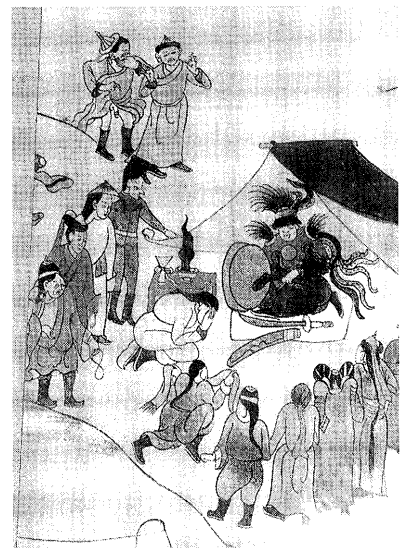


清代蒙古族寺廟查瑪法會照片

彼等の儀式及び舞踊を見るに、先づ四方を拝し、次に諸神の御名を称へて之を呼び集めたる後、一種の祝詞を唱えつゝ太鼓をたゞきて踊り始む。其の踊りは、太鼓を打ち乍ら足を右方、左方或いは円形に滑らすなり。又太鼓の打ち方はドン、ドドン、ドドンにして、最初は緩やかなるも漸次急激となり、幾度も繰り返して踊り狂へり。太鼓の音、柄の端にある錫杖の揺ぐ音、腰鏡の相触るゝ音、互ひに相和して一種の調子を生ぜり。彼等の踊りは愈々急激となり、遂には殆

んど人事不覚の状態に入り、其の極斃れて止むに至る。(注15)

なお、彼等シャーマンの語るところによれば、『蒙古旅行』には次のように記している。病家に招かれたる時には、先ず氈帳



清代蒙古族薩滿法事帛画

内に Ongoto と称する神を祭り、神前に一頭の殺したる羊及び乳にて作れる神酒とを供へ、巫人も共に飲食し、次に病人を其の前に座せしめ、病人を中に挟みて彼等は祈禱を始むるなり。即ち前に述べたる如く諸神を呼び集め、太鼓を打ち、祝詞を唱へつゝ踊り、病人の額に唾し、而して巫人は刀を抜き放ちて病人の胸部をつき、以て病人の腹中に醗れる悪霊の血を退去せしめたる後、プープーと呼吸を吹きかけ、善霊を吹き入れたる時、血は止まり病は立ち所に癒ゆ。巫人の言に従へば、世に善悪の二霊ありて、悪霊体内に入れば即ち病を生ず。彼等は祈禱によりて此の悪霊を去らしめ、善霊を呼び入るゝなりと。こは明かにシャーマン教の事実を具備せるものなり。彼の巫女は又、常に銅製の二種の神像と一面の古鏡とを恭しく懷中せり。此の神像は Ongoto にし、一は即ち Botor Ongoto 他は Bomono Ongoto 是なり。(中略) 又古鏡 (Toli) は此の二神像と等しく、彼の最も秘蔵する処にして、布につゝみて恭しく懷中し、恰も一種の御霊の如く感じ居るものに似たり。鏡は直径二寸七分強にして、中央に紐を通ずる孔あり。鏡面には菊花の文様(菊の花及び葉等あり)を有し、其の縁辺に当たって〇〇〇〇〇〇の如き模様あり。此の二神像及び古鏡は、最も神秘にして而も靈驗いやちこなるものと信じ居れり。此の三品は古くより彼の家に伝ふるものにして、代々子孫に譲り行くものなりと云ふ。

(注16)

以上、鳥居龍藏氏の『蒙古旅行』から当時のシャーマン教の状況につい

て見て来た。

六、従来のシャーマニズム論について

ここで私たちは従来のシャーマニズム論について一考しておかねばならないだろう。従来のシャーマニズム論は脱魂型とか憑依型などといった好い加減な分類（実は分類にもなっていない）で終始しており、その基本的なコードは機械論的実体論であるということである。そこでは神も一個の物のように見なししており、心もその人の身体の中に異物があるかのように語られている。全く無智な、事の本質を洞察できない精神状況にある人がそう思うのは無理からぬことである。ただ、不幸なことに、西欧教育システムは精神現象を機械論的実体論によって語られる悪弊を生んでしまったことである。その一番良い例が折口流の鎮魂論（外来魂附着説）である。折口氏は鎮魂が分らなければ神道は分らない：などと力説はしたものの、自身、鎮魂について全く分からなかった人である（注17）。ここで、『日本書紀』巻第一、神代上（一書第六）の大己貴神の「国作り」の条を見ることがしよう。

自後、国の中に未だ成らざる所をば、大己貴神^{おほみかみのかみ}、獨能く巡り造る。遂に出雲国に到りて、乃ち興言して曰はく、「夫れ葦原中国は、本より荒芒びたり。磐石草木に至及るまでに、威に能く強暴る。然れども吾已に摧き伏せて、和順はずといふこと莫し」とのたまふ。遂に因りて言はく、「今此の国を理むるは、唯し吾一身のみなり。其れ吾と共に天下を理むべき者、蓋し有りや」とのたまふ。

時に、神しき光海に照して、忽然に浮び来る者有り。曰はく、「如し吾在らずは、汝何ぞ能く此の国を平けましや。吾が在るに由りての故に、汝其の大きに造る績を建つこと得たり」といふ。是の時に、大己貴神問ひて曰はく、「然らば汝は是誰ぞ」とのたまふ。對へて曰はく、「吾れは是汝が幸魂奇魂なり」といふ。大己貴神の曰はく、「唯然なり。廻ち知りぬ、汝は是吾が幸魂奇魂なり。今何処にか住まむと欲ふ」とのたまふ。對へて曰はく、「吾は日本国の三諸山に住まむと欲ふ」といふ。故、即ち宮を彼所に営りて、就きて居しきまむ。此れ、大三

輪の神なり。（注18）

即ち、大己貴神は自分と協力してこの天下を治めてくれる神はいないものかと憂う時に、はからずも海面を照らしながら忽然として寄り来る光り輝く存在に出会うのである。その光り輝く存在は「もしも私が居なかったら、あなたはこの国を平定することは叶わなかったのだ。私が居たからこそ、あなたはこうして功績を立てる事が出来たのだ」と言った。そこで大己貴神が「あなたは一体誰なのか？」と問うと、「私はあなたの幸魂奇魂である」と答えた。つまり、「私はあなただ！」と言った訳である。大己貴神は直ちにそれが自分であることを知り、自分のたましひ（幸魂奇魂）に向つて「ではあなたは何処に住もうと思うか？」と問うと、そのたましひは「三諸山に住もうと思う」と答えたので、そのようにした：と記されて居るのである。

大己貴神が自分の魂を身体の中府に鎮めたりしてはいないという点に留意すべきである。なお、『古事記』では大己貴神が大国主神と表記されているが、内容においては『日本書紀』とほぼ同旨である。ここで記されている「幸魂奇魂」が大己貴神のたましひ、即ち遊離魂であることは疑いの無いところであろう。（注19）

では一体、折口信夫説はこの大己貴命の国作り神話をどう説明できるだろうか？もし、彼の言う如くであれば、大己貴命は生氣なく死体として横たわっていないと話にならない。何故ならば、大己貴命の魂は外にあつて、「お前の魂だ」と主張しているのである。しかし、大己貴命は現に神として光り輝く存在として立ち顯われており、死体として横たわっているなどとは何処にも書いていない。そして、なによりも、魂があるべき場所が大己貴命の身体の中などではなく、つまり神界に坐しているということが明記されている。本当の大己貴命にとつては、実は神界に属している。しかるべき秩序にこの世が保たれた時に平和と繁栄が訪れる一となつていて、これが事の本質なのであつて、ここに機械論などが入る余地は微塵もない。幼稚な機械論では、身体という袋に魂が入り込んで人は生きていと思ひ込んでゐる。実際、ネストリウス派キリスト教の影響など西域の機械論の影響の下で離神記類が多いに書かれ、そこには脱魂説を保証するような世界観が作られていたことは否めない。例えば唐代の代表作である『搜神記』

(注20)では、親から決められた許婚^{いいなづけ}がその結婚先の家の没落によって、無理矢理別れさせられようとした時に、許婚の女性が病に伏してしまい、完全に気を失ってしまう。然し実は、その女性はもう一人の人間として許婚の夫の下で生活をしていて、長年経ってその夫婦が親許に戻ってきた時に、二人の女性が一つに重なって一人の女性になった……というような物語が書かれている。これは唐代にのみ固有のパターンの物語であり、ネストリウス派の影響が無くなると共にスツカリ姿を消してしまう。

シャーマニズムの概念を提唱したのは他でもないシカゴ大学のミルチア・エリアーデ氏であり、彼の著作全体を貫いているのは機械論的実体論であり、近代思想の持つている危険なワナに嵌まった一人ともいえる(注21)。無形の霊魂の働きを機械論的に見てしまったのである。神と人との関係に関する素朴な前提の元で「神Ⅱ外なる物体」、「人Ⅱ心という物体を持った入れ物」という図式を仮定し、神である外にある物体が或る人を選んでその物体の心に附着して行動に影響を与えるという図式を妄想し(憑依型^{ポセッショナル})、また物体としての心を持った人からその心が抜け出して、天界の神という物体に出会って、神の力を貰い、地上へ戻ってきて神の世界を語る(脱魂型^{エクスタシー})という、極めて機械論的な図式を妄想して、そのような状態に陥った人をシャーマンと呼んだに過ぎない。それはあくまでもM・エリアーデの機械論的な解釈なのであって、実は「神と人の心との関係」に関しての考察が一切抜け落ちてしまっている。所詮は別個の物体であって、接触することで影響を受けるとしか捉えていない。このような視点では、永遠に件の大己貴命の物語について、何一つ分らないであろう。(注22)

エリアーデ氏が捉えようとしたシャーマニズムの現象と言われているものは、神と人との関係について全く違ったパラダイムから捉え直さなければならぬ。その根幹にあるのは閉じた実体としての個、個人とか実体としての神という、機械論的な前提を根幹から消し去る必要がある。大己貴命は一神として描かれてはいるが神界の神そのものであり、その神界の神そのものであるということを受け入れることを通して、平和と繁栄がもたらされているという重要なメッセージを伝えている。

人が何故、コミュニケーションが出来るのか、その根幹に個が実体として閉じていないということを本質的な問題として我々が受け入れる必要が

ある。その視点に立った時に、憑依や脱魂などと騒いでいる従来のシャーマニズム論が如何に浅薄な理論であるかということが明らかに出来る。日本は憑依と脱魂の混合型である……などと言って得意満面としている学者たちの、その神経を疑うべきである。何でも分類したが、ままと遊びのように類型化してあたかも分ったかのような気になっているこれ等の者達は修行の現場については全く無智であり、また、これが胡散臭い科学という学問の限界でもあることを知っておくべきであろう。

七、おわりに

中国では今、何処でも民間宗教が盛んに復活しているが、モンゴルにおける宗教はいえどもとシャーマニズム信仰であった。それが一六世紀以降になると仏教が入り込んでシャーマンが弾圧されて、モンゴル人は殆どが仏教徒になってしまった。シャーマニズム信仰が残っているところといえ、今ではホルチン地方にしか見られないようである。ついで文化大革命(一九六六―一九七六)によって、民間信仰は迷信(牛鬼蛇神)とみなされ、それは丁度日本における廃仏毀釈さながらにシャーマンたちはオングッド(神像)はもとより、神祀りのための一切の神具(神衣・神像ほか)を政府に没収されたり、山に廃棄したりさせられたのである。仏教を受け入れ、仏教と習合したシャーマンは白いシャーマン、仏教を受け入れなかったシャーマンは黒いシャーマンと呼ばれた。

すでに述べたように、今では世界中どこでも西欧思想や学問、文化が席卷し、誰もが西洋科学合理主義にドップリ染まり切ってしまったために、現地のシャーマニズム研究者でさえもシャーマンを「憑依型」とか「脱魂型」などと分類し、あるいは世襲型・非世襲型・習得型などと分類することで立派な研究であるかのように錯覚している状況にあり、なんとも嘆かわしい限りではある。

さて、日本に帰国する前夜は大連の日本人が経営するホテルに泊まったが、レストランで夕食をとっているとオーナーが気を利かせてくれて、お刺身や野菜サラダなどをおまけしてくれた。ホテルで日本のニュース番組を見てみると、群馬県館林市では午後二時に何と四〇・二度という記録的

猛暑であり、仙台では三七・八度を記録し、この猛暑は七八年振りであるという。また北海道の釧路では普段なら二一・五度が今日は三五・四度にもなり、鉄道線路が最大五センチ歪むなどしたという。また、北海道のある製菓会社では売れ残り商品の賞味期限改竄問題などが報じられていた。

そうしたニュースを見ながら、日本の宗教事情をふと考えて見たが、暗澹たる思いに囚われてしまう。純粹に信仰に生き抜く人はほんの一握りであると言つてよく、何処も状況は一緒である。聖職者は誰もが職業化し、或いはサラリーマン化してしまつており、名利榮達など世俗の一切を捨て切り、ただ一筋に神あるいは「みほとけ」との出会いに己が全身全霊を傾けて生き抜く……といった真の宗教者には今日お目にかかれないようになつてしまつた。かつての日本の名僧たちは悟りを得るためにひたすら仏との出会いを求め、橋の下を住みかとし、自分の悪をトコトン見つめ、その悪の懺悔を己の宗教の本質とした。その意味で、今や宗教の本質を大半の人が見失つており、更にひどいことに宗教者を自認する人間たちが「一番、自分は善人だ」と思い込んでおり、恐るべき知の貧困、人間性の崩壊が進行している。禪にしても「心身一如」と言うことで二元論を越えようとしているが、機械論的実体論に縛られた現代の禅僧達にとつては、これは全く意味のない言葉なのではないか。その根本は所詮、彼等は個人が実体として閉じている——という固定的な觀念から一歩も抜け出していないところが問題である。「個人実体論」で皆、縛られてしまつており、これでは永遠に真実は分らないだろう。これがいつの世も、何処においても変らぬ真実——というものなのだろう。

【註】

- (1) E・デュルケム『宗教生活の原初形態』上下（古野清人訳、岩波書店、一九八七年九月）参照。
 - (2) 鳥居龍蔵『満蒙の探查』（『鳥居龍蔵全集』、第九卷、昭和五〇年一月、朝日新聞社）一八四〜一八五頁。
- 蒙古の学術的調査研究は一八六四年におけるアメリカのパンペリーの探検を嚆矢とする。鳥居龍蔵氏は明治三八年に東蒙古の一部に踏査の足を印し、同三九年から（内）蒙古人の身体測定を始めとし、

俚歌、童謡、童語（話）等の蒐集に従い、時間の余裕あれば（喀喇沁）王府付近を廻りて、諸種の調査に従事し、さらに、同四〇年から四一年にかけて、東蒙古の巴林・翁牛特を中心にして興安嶺を東西に跋渉し、北はブユルノール畔から南は赤峰・多倫諾爾に至る地域を、人類学的・民族学的、考古学的、また民俗学的に探査された。また、昭和二年、同五年の旅行はいずれも大連を起点として行われた。鳥居龍蔵氏にとつて限られた乏しい調査費での研究調査であつたが、その調査の成果は本書「解題」には次のように記されている。

「世界の学問上に向つて、自ら其の発見たるを誇る」に足るところの「東蒙古の有史以前Ⅱ石器時代」と、いわゆる東胡民族に属する鮮卑・烏丸、そして契丹（遼）の遺跡・遺物の調査、遼の上京の位置の確定、その詳細な探査、渤海の故都の踏査、それと遼・金の故都との比較研究、満州における漢代の石槨式古墳の最初にしてかつ完全な発掘、満州の遼代画像石の精査、そして、遼の慶州城址、慶陵の調査、そこに描かれた遼代壁画の研究、さらに、ドルメン・メンヒル（長大な立石）など巨石記念物の新発見そのほか、ほとんど枚挙にいとまがない。『同右書』（「解題」護雅夫五八二〜五九二頁）。

- (3) 加地伸行『儒教とはなにか』「第三章 儒教の成立」（中公新書、二〇〇七年四月）五二〜五四頁。
- (4) 加地伸行『同右書』五三頁。
- (5) 鳥居龍蔵『満蒙の探查』（『鳥居龍蔵全集』、第九卷、昭和五〇年一月、朝日新聞社）三八七頁。
- (6) 鳥居龍蔵『同右書』三九〇頁。
- (7) 鳥居龍蔵『前掲書』三九〇頁。
- (8) 鳥居龍蔵『前掲書』三九〇頁。
- (9) 鳥居龍蔵『前掲書』一八四〜一八五頁。
- (10) 鳥居龍蔵『前掲書』五八二〜五八三頁。
- (11) 鳥居龍蔵『前掲書』一七三頁。
- (12) 鳥居龍蔵『前掲書』三八九頁。

- (13) 鳥居龍蔵『前掲書』一九二頁。
 - (14) 鳥居龍蔵『前掲書』一九二、一九三頁。
 - (15) 鳥居龍蔵『前掲書』一九三頁。
 - (16) 鳥居龍蔵『前掲書』一九三頁。
 - (17) 『折口信夫全集』第二卷(国文学篇六、中公文庫、昭和五一年四月三九四～三九五頁)。
 - (18) 『日本書紀』(日本古典文学大系六七、岩波書店、一九八四年一月一二九～一三〇頁)。
 - (19) たとえば折口信夫は「色々の動作をして揺がす・魂をえぶる・魂をゆすぶって完全に人間の身体に其外来魂を附着させるといふ、鎮魂の第一義があるのである」などと述べている。
 - (20) 『折口信夫全集』第二卷(国文学篇六、中公文庫、昭和五一年四月三九四～三九五頁)。
 - (21) 于宝『搜神記』中国の小説(二〇巻)。四世紀の成立。逸話や古奇談、民間説話などを記録したもので、仏教の影響を受け、中国小説の最古のもの。
 - (22) 『シャーマニズム』M・エリアーデ(堀一郎訳、冬樹社、昭和五六年九月)ミルチア・エリアーデ(一九〇七―八六年)はルーマニア出身の宗教学者であり作家。ブカレストに生まれ、ブカレスト大学からインドへ留学。五六年の渡米後にシカゴ大学の教授になる。彼はシャーマニズムを「エクスタシーの始原的な諸技術である」と定義した。
- また、ウノ・ハルヴァ『シャーマニズム―アルタイ系諸民族の世界像』(三省堂、一九八〇年十二月)など参照。
- レヴィーストロースは単に何々型と分類することで分ったつもりになつて喜んでいるだけの今までの神話研究を意味のないものとして疑っている。『仮面の道』あるいは『野生の思考』(大橋保夫訳、みすず書房、一九八九年八月)など参照。